

Polyeucte 又は恩寵の悲劇

村 瀬 延 哉

序

“*Polyeucte, martyr*”は Corneille の最初の *tragédie chrétienne* である。彼は1645年の “*Théodore, vierge et martyr*”を除いて、二度とこのジャンルに手を染めることはなかった。“*Le Cid*”, “*Horace*”, “*Cinna*”と続く一連の傑作の後で、何が作者を宗教劇に向かわせたのか？この点については後程本論で触れる。ジャンルの特異性は、“*Polyeucte*”に従来の作品にない性格を与えることになった。神の恩寵 (*grâce*) が重要な役割を果たす点である。このような超自然的な力の介入は、非常に合理的に構成されてきた彼の過去の作品、つまり登場人物の行動の動機が、通常の間人心理や理性作用の枠を越えることのなかった作品群と比較する時、劇作術の一大転換を思わせる。“*Polyeucte est la tragédie de la grâce. C'est-à-dire que cette pièce fait intervenir une force mystérieuse, surnaturelle, qui échappe aux prises de l'homme, de sa raison et de sa conscience. Une force par conséquent qui, par nature, fait éclater les cadres habituels de la tragédie cornélienne, où nul mouvement n'apparaît qui ne s'explique par des raisons très précises. On pouvait exactement savoir quels mobiles déterminent les gestes d'Horace, ou d'Emilie, ou d'Auguste. Aucune force contrôlable ne peut expliquer la résolution de Polyeucte, la conversion de Pauline ou de Félix.*”^①

だが一方 Nadal も指摘するように、同時代の宗教劇と比較すれば、“*Polyeucte*”は荒唐無稽な奇蹟の濫用を免れている数少ない作品でもある^②。この作品に文学史上不朽の位置を失わせない理由の一つでもあろう。本論が

問題とするのもこの点にある。“Polyeucte”の人物達の行為が表面的には恩寵の作用と見える場合でも、それを観客に不自然なく受け入れさせる、或いは恩寵を無用なものとする程の、心理的必然性を作者は与えていなかったか？極論すれば christianisme の外装をはぎとつても作品が成立し得るだけの人間的感情が、行為の根底に存在していなかったか？この観点から、主に先の引用中 Adam が説明不可能だとした三つの場合、Polyeucte の偶像破壊の決意、Pauline と Félix の改宗に検討を加えたい。

検討に入る前に、“Polyeucte”の初演年代、sources, 作者を宗教劇に向かわせた当時の精神風土、作品がひきおこした反響等の、作品理解に不可欠な事実を明らかにしておく。

1

“Polyeucte”は1643年1月30日に *privilège* を受け、同年10月20日に印刷を完了した。初演年代は当然これ以前に溯るが、なお不確定な要素が多い。1642年12月12日付けの書簡で Claude Sarrau は Corneille に、同月4日死去した Richelieu 追悼の詩 (*carmen*) の製作を勧めながら、彼の近況を尋ねている。Sarrau は、“貴方の比類なく高貴な3戯曲に、第4番目の作品を (*drama*) 加える計画があるか”と尋ね、数行後には“もれ聞くとくところでは貴方はある宗教詩を (*poema*) 製作中らしいが、その仕事が捗っているか或いは完成したか教えて頂きたい^⑧”と書いている。Marty-Laveaux はこの三作品が、“Le Cid”, “Horace”, “Cinna”を、製作中の宗教詩が“Polyeucte”を差すことは明らかだとし、全集三巻で主張した40年説を訂正、43年とした。しかし一方“Pratique du Théâtre”中に、Richelieu が“Polyeucte”を非難したという D'Aubignac の証言が残っている。彼の死が42年12月4日であるから、それ以前に上演されていなければならない。

Pintard は prince de Condé の侍医 Pierre Bourdelot の手紙から、従来の説を覆し“Polyeucte”の前作“Cinna”の初演を42年7月とした。そ

して Bourdelot の手紙とも矛盾せず、Sarrau や D'Aubignac の証言にも合致する場合として、“Polyeucte” は1642年10月17日から11月8日までに Richelieu の前でマレー座員によって演じられた後、42年12月末から43年1月の間に同座で公開初演されたと推定している。Richelieu が観劇した日付の根拠は次の如くである。彼が Roussillon 地方遠征のため、Fontainebleau を42年2月に出発して、再び Palais-Cardinal に帰るのは同年10月17日である。遠征中の5月、腕に膿瘍を患い悪化、11月18日 Palais-Cardinal で Desmarets de Saint-Sorlin の“Europe”の舞台稽古が行われた時、既に列席不可能な状態にあった。しかしこの間、同館ではマレー座員により“Europe”の下稽古が幾度か行われており、恐らく Richelieu はこの時近々上演することになっていた“Polyeucte”に接する機会を得たのであろう。^④42—43年初演は Couton, Herland, Mongrédien 等にも支持されており、最も有力な説である。

Stegmann は、Sarrau が“drama”と“poema”を無差別に使っている可能性もあるが、本来なら“poema”によって劇作品を連想することは難しい。彼が“比類なく高貴な三戯曲”と呼んでいるのは、“Horace”, “Cinna”, “Polyeucte”であり、製作中の宗教詩は“Epitaphe de Dom Jean Goulu”である。“drama”と“poema”が混同されているとしたら、製作作品は“Théodore”の可能性もある。いづれにしる“Polyeucte”の初演は1641年春まで溯らねばならないと、考えた。又 Adam は、“17世紀フランス文学史”中で1641—1642のシーズンを、Lancaster も同時期を初演時としている。^⑤^⑥^⑦

2

“Polyeucte”の出典は作者自身が明らかにしている。コンスタンチノープルの人 Siméon Métaphraste が10世紀に編纂した“聖人伝”である。ギリシア語で書かれていた。16世紀になってヴェニス^⑧の聖職者 Aloisio Lippomani がこれをラテン語訳した。更に1570年ドイツ人のシャルトル

会修道士 Laurent Surius が新教臭の強いものを削除、文体、配列などにも修正をほどこし、増補分を加えて出版する。彼の仕事を同僚の Père Mosander が引継ぎ完成させる。Corneille が所有したのは、この Mosander の手になる1618年の Cologne 版であろうと思われる。

Surius の Polyeucte 伝は、“Saint Polyeucte の殉教の概要”や“Examen”で作者が詳述しているから省略する。Corneille が出典を示すのは、自分の作品が史実に基いていることを明らかにして、vraisemblance という厄介な問題を解決するためである。ただ、この場合には宗教劇という題材の特殊性も関係している。後で触れるように、当時少くとも doctes や gens d'Egliseの間では、christianisme を舞台にのせることをよしとしない風潮が確立されつつあった。理由の一つは、作者の fictions と Dieu の手になる神聖な mystères が混同されることにより、“偽りに真理の外観を、真理に偽りの caractère を与え”、民衆の信仰心を損うという点にある。従って Corneille は、作品の冒頭で“vérité”と単に“ornements”にすぎぬものを区別する必要があると感じたのである。“ornements”つまり彼の創作は、彼の言を信じれば、“Pauline の夢、Sévère の恋、Polyeucte の baptême effectif、皇帝の勝利を祝う犠牲祭、アルメニア総督とした Félix の権威、Néarque の死、Félix と Pauline の改宗”である^⑧。

Surius の“聖人伝”には、“Polyeucte”の主要人物のうち、Sévère の姿が見当たらない。Corneille は“Sévère の恋”を独創としているが、この人物を含めて多くのものを、Jean-Pierre Camus の二つの小説、“La première partie d'Alexis” (1622)、“Agathonphile” (1621) に負うているようである。Camus は Belley の司教職を辞した後、1629年ノルマンディの Aulnay の abbaye となる。更にその直後病気で倒れた Rouen の大司教 Harlay の要請を受け、司教総代理の地位に置く。同じく Rouen 人の Corneille は、精力的な宗教上、文学上の活動で著名であった Camus とこの頃面識を持ったと思われる。Paris では共に Hôtel de Liencourt に出入りしていた。Adam は両者が友人関係にあったと断定している^⑨。

Camus は “l’Astrée” の如き恋愛小説が読者を墮落させることを憂い、驚くべき多産さで romans édifiants を書き続けた。

“Alexis” 中で、数多くのエピソードが語られるが、Marcel と Colombe の恋物語もその一つである。二人は、Sévère と Pauline を連想させる。Marcel を愛しながらも、Pauline 同様 Colombe は父親の命に従い、Hermin と結婚する。彼女が Marcel に対する愛情を devoir に従って克服したのだと述べる件。これを知った Marcel が Colombe や Hermin を恨むどころか、逆に彼女の vertu を贅える点。特に彼女の réputation や renommée への配慮から恋情を断念することなどは、“Polyeucte” を思わせる。エピソードは Marcel の回想談の体裁をとるが、聞き手である Méliton も含めて、Marcel, Colombe, Méliton の三人が発する言葉は、偶然に帰するには余りにも二幕二場の Sévère と Pauline の台詞に酷似している。

“Agathonphile” に Sévère という名の人物を見出すことができる。“皇帝に非常に優遇され、その助言は大変権威があり、偉く、権勢のある老宮廷人^⑩。” “Polyeucte” の Sévère と身分上も似ている。

Girolamo Bartolommei の “Polietto” も source に数えねばなるまい。この悲劇は1632年 Rouen で再版を重ねている。Bartolommei の “Teodora” が、“Théodore” の sources の一つであることからしても、Corneille がこのイタリア作家の悲劇に目を通していたことは確実であろう。“Polietto” は “Polyeucte” と同じ Métaphraste の “聖人伝” に題材を取っているから、共通点があるのは当然だが、注目すべきは “聖人伝” に叙述のない事柄についても、なお共通要素が存在することである。たとえば Félix の身分。Corneille は l’action に権威を与えるため、彼をアルメニア総督としたことを自分の創作に数えている。だが Bartolommei の Félice は既に総督の地位にある。又彼の保身家で臆病な性格も、Bartolommei では一層輪をかけて描かれている。“Polietto” では同名の主人公が、対ベルシヤ戦役の指揮官に選ばれ、総督の館に向かう途中で、Artabano の奸計により “défilé des dieux” に遭遇する。既に改宗していた主人公は、信仰に

従って偶像を破壊する。これはペルシア戦争に於ける“皇帝の勝利を祝う犠牲祭”で、偶像を破壊した Polyeucte の場合を連想させる。第一幕で Policarpo と Polietto の *songes* が全体のストオリィを暗示している点も、Pauline の *songe* と考え合わせると興味深い。但し、この手法は当時の常套手段であるから、あえて Bartolommei からの借用とする必要はあるまい。

3

“Polyeucte”の直接の sources は今述べた如くだが、これ以外に間接的に作者に影響を与え、宗教劇執筆へ向かわせたと推測できる幾つかの要因を列挙しておく。まず、初演年代は必ずしも明確でないが、1640年代の前半に起った宗教劇の再生、流行。Corneille の二作品以外に、du Ryer: “Saül” (1640), “Esther” (1642), abée d’Aubignac: “La Pucelle d’Orléans” (1640), Puget de la Serre: “Le Martyre de Sainte Catherine” (1641—1642), Saint-Germain: “Sainte Catherine” (1641—1642), Desfontaines: “Le Martyre de Saint-Eustache” (1643), “L’Illustre Comédien, ou le Martyre de Saint Genest” (1644), Rotrou: “Le Véritable Saint Genest” (1645—1646), Baro: “Saint-Eustache” などがこの時期に集中している。42年に刊行された“Saül”の序で、du Ryer は “grands génies” に向い、このジャンルで自分の後に従うよう呼びかけている。“je souhaite…que mes maîtres, je veux dire ces grands génies qui rendraient l’ancienne Grèce envieuse de la France, deviennent mes imitateurs dans un dessin si glorieux.”^⑩ 宗教悲劇の流行が観客の動向を見るに敏であった Corneille を刺激し、当時随一の génie としての彼の競争心も加わって、“Polyeucte”執筆の一因をなしたと思われる。

フランス語で書かれた tragédie sacrée は、“Polyeucte”に先行する80年程の歴史を持つだけだが、それ以外に中世の長い *drame sacré* の伝統がある。14,5世紀に盛えた miracle は16世紀に入るとほとんど絶滅した。

しかし *mystère* は1548年の *Parlement* の禁止令後も Paris 以外の各地で演じられ続けた。 *morality* に至っては1640年頃でも地方の舞台で見ることができた。“*Acta Sanctorum*”, “*Légendes dorées*” 等の聖人伝の広範な流布と相まって、 *Corneille* をとりまく環境には宗教的伝統が生きていた。

彼が学んだ Rouen の *jésuite* の学院では、宗教劇を学生達に演じさせて教育の一環とした。“*Examen*” で引用されている著名な人文主義者、 *Buchanan*, *Grotius*, *Heinsius* 等の作品も *レパトトリ* に含まれていたらしい。優等生の彼は、自分でも学院芝居を演じたことがあったろう。

Corneille の生地ノルマンディから、“*folie de la croix*” に憑かれた、熱烈な信仰者が輩出している。*Polyeucte* の言動に過度の宗教的昂揚を認める者は、作者にとってそれが単なる想像の世界の出来事でなかったことを見逃してはなるまい。*Polyeucte* との精神的類縁性を例証するはずの人物達を、 *Calvet*, *Dédéyan* の著作から紹介しよう。1611年 *Basse-Normandie* の貴族の一人息子として生れ、 *Caen*, *Rouen* 等の *Compagnie du Saint-Sacrement* の創設者となった *Gaston de Renty* は若くして世間を捨て、布教と貧者、病人救済の生活に入る。兵士の暴行を受け、梅毒を病んだ女を、“この腐った肉体から発する胸むかつかせる悪臭が、えも言われぬ芳香であるかのように” 献身的に看護したと言われる。彼は又、広場で大貴族の馬車を止め、 *Saint Sacrement* に対する敬意を強要する。この世で最愛の者を神に捧げたという理由により、妻の死から激しい歓喜を味った。

Renty の弟子で、同じく大貴族の身分を捨て、 *Companie du Saint-Sacrement* に尽した *Jean de Bernières Louvigny*。彼は偽装結婚をして、カナダ伝道を希望する *M^me de la Peltrie* の便宜を図る。彼女と共に、ウルスラ童貞会の *Mère Marie de l'Incarnation* 他一名がカナダに渡ることになる。*Marie de l'Incarnation* は、元の名を *M^me Martin* と言い、1630年一人息子を捨てて、 *Nantes* の聖母訪問会に入った。子供の遺棄は、 *Polyeucte* の偶像破壊同様、カトリックの公会議が禁ずる行為であった。

彼女の噂はノルマンディ地方に高まり、Corneille の耳にも達していたと思われる。1639年カナダ出発を前に、彼女達はその地の蛮族から受ける迫害に思いを致す。だが、まさしくこの殉教の期待こそ、彼女らの心を逸らせるものなのだ。“C'est particulièrement ce point qui leur faisait dilater le cœur par le désir qu'elles avaient du martyr.”^⑬ Bernières の思い。“Mère de l'Incarnation は少しも彼に憐憫の念を引き起さなかった。彼は彼女がイエス・キリストのため犠牲に供され、生贄とされ、生きながら焼かれることを願った。M^me de la Peltrie に対しても彼は同じような願いを示した。”^⑭

4

“Polyeucte” の上演はいかなる反響を引き起したか？上演に先立って Hôtel de Rambouillet で作品が朗読される。“戯曲は礼節と、作者の高名に適った称賛を浴びる。”^⑮ だが数日後 Voiture が遠廻しにサロンの真意を伝えて来る。“Polyeucte は Corneille が思ったような好評を博さなかった。特に christianisme がひどく皆の気を損ねた。”不安に駆られた作者は下稽古に入っていた戯曲を回収しようとするが、或る大根役者の勧めで思いとどまる。無名の俳優がフランス古典悲劇中最高の傑作を救ったのである。Lancaster は Fontenelle が伝えるこの有名な逸話を否定している。^⑯ 俳優の考証も行われたが臆測の域を出ない。だが真偽は別にして、エピソードは当時の教養人、学者、教会関係者の宗教劇に対する見方を巧みに映し出している。一方には Godeau や既に引用した du Ryer など tragédie chrétienne の創造を主張する人物もいた。しかし一般的に言って、同時代の honnêtes gens は vie religieuse と演劇の楽しみ、広く言えば vie mondaine とを区別していた。尊敬をこめて扱われるべき宗教が役者達の手にかかって冒瀆を被ることも、逆にそのしかつめらしきで、芝居のせわかくの楽しみを合無しにされることも望まなかった。演劇が信仰心の発露であった中世の民衆の素朴さは既に彼らのものではなかった。

1639年つまり従来の説によれば、Baro の“Saint-Eustache”が上演され、ルイ13世下における tragédie sacrée 復興の口火が切られた年に、La Mesnardière は劇詩の題材を宗教の領域に求めぬのが妥当だと表明する。“わが国の詩人達が、外国の詩人と異り、mystères de Religion のでっち上げを差し控えている点では大いに称賛に値し、divertissements 中に、かくも敬うべき事柄を利用しない信仰心は彼らの魂の善良さの少なからぬ証拠であることを認めねばならぬ。”¹⁷ 同一年に Grenaille は、“図々しく宗教と芝居を交ぜ合わせてはならぬ”¹⁸と、又47年にはVossius が“寓話や芝居に変えられることは choses saintes の権威にふさわしからぬ”¹⁹と述べている。更に時代が下ると、40年代初めに自分でも宗教劇を書いた D'Aubignac が、“私は、人々が Ecritures saintes 中に叙事詩や劇詩の主題を求めることが許せない。なぜなら作者の fictions が、神によって我々に啓示された mystères と混同されるや、偽りに真理の外観を、真理に偽りの caractère を与えるからだ。”²⁰と主張する。Saint-Evremond は matières saintes の劇化が信仰の観点からだけでなく、演劇の楽しみという面からも好ましからぬと考えた。“最も神聖な教義、最もキリスト教的な行為、最も有益な真理から、最も面白味の少ない悲劇ができあがるだろう。”何故か？“我々の宗教的精神は悲劇の精神と真向から対立する。聖者達の謙遜と忍従は劇が要求する英雄達の vertus と余りにも反対のものである。”更にBoileau が“詩学”中で、“Dieu, les Saints et ses Prophètes”や“les mystères terribles de la foi d'un Chrétien”の登場が劇に不適當であると²¹して、止めをさす。

Hôtel de Rambouillet 以外の“Polyeucte”に対する批評はどうか？既に述べた如く生前作品に接する機会を持った Richelieu は、“侍女にすぎぬ Stratonice やその他の役者達が異教徒の信仰のために弁じ、キリスト教に対し数知れぬ冒瀆の言葉を吐く(…)作者はこれに反論し、その誤りを打破ることのできる人物を一人も登場させていない”²²点を許し難いとした。たとえば Stratonice の次のような台詞。“Un méchant, un infâme, un

rebelle, un perfide, / Un traître, un scélérat, un lâche, un parricide, /
 Une peste exécration à tous les gens de bien, / Un sacrilège impie: en
 un mot, un chrétien²³”.

D'Aubignac が非難するのは、殉教の神聖な悲劇の中に、Pauline と Sévère の不倫の恋が描かれていることだ。このような *mélange* は決して許されぬ。“Corneille 氏が *Martyre de Polyeucte* 中で陥った誤りがこれである。多くのキリスト教徒らしい会話、多くの宗教上の美しい *sentiments* にまじって、Pauline は *honnête femme* にまったくふさわしからぬ会話を Sévère と交す。” Saint-Evremond は D'Aubignac と逆の見解を示す。殉教者の “*vertus chrétiennes*” の無味乾燥な描写だけなら、作者は名声を失っていただろう。失敗から救ったのは、このような美德と “別の感情、別の情熱に動かされた Pauline と Sévère の対話” の美しさである²⁴。prince de Conti も Saint-Evremond と同じ見方をしている。

Corneille は反宗教劇の風潮の中で、どのように自己弁護を試みたか？ Surlin の原本と自分の *fiction*s を綿密に区別し、読者が宗教上の敬意を払うべきものに敬意を欠いたり、その逆のことが起らないよう配慮したことは既に述べた。Académie が “聖書のどんな短いつづりでも、余りに神聖なので変更を全く許さない” と判断していることについては、彼のように聖人伝を取材源とした時には、歴史書と同じように変更を加えることができるとしている。

不都合はアリストテレスの “詩学” から生れる。彼が悲劇の主人公にふさわしいと考えたのは “完全に善良でも完全に悪人でもない人物である。” “完全に徳高き人々が不幸におちいるケースを除外するとすれば、我々の舞台から *martyrs* を追放することになる。Polyeucte はこの規則に反して成功した。” Corneille は例の如く煩瑣な論理を展開して、アリストテレスと和解を試みる。哲学者が “完全に徳高き人々が不幸におちいるケース” を除外したのは、これが観客の正義感を著しく損って、不快を感じさせるからである。つまり悲劇の目的が *pitié* と *crainte* の情の喚起にあ

るとすれば、このように大きすぎる不正は、主人公を迫害する者に対する憤りと憎しみの方を多く生み出す。これらの情念は観客を焦ら立たせ、悲劇本来の感情を損う作用をする。だから逆に言えば迫害者が観客に過度の憤りを覚えさせる程悪人でない場合には、徳高き人物を主人公とすることも可能である。Félix の場合がそれである。彼の行為はキリスト教徒への憎悪と言うより、Sévère の報復を恐れる、臆病な保身本能の結果である。従って観客の胸中で、Félix への嫌悪が Polyeucte に対する pitié を抹消する危険はない。

又 Corneille は Grotius や Buchanan が殉教を扱った宗教悲劇を書いていること、“詩学”の翻訳者でもある Heinsius が彼に有利な理論を述べていることなど、当代の権威者からも弁明の根拠を借りている。

“Polyeucte”の上演は、上記の如き識者達の批判にもかかわらず成功した。“Le Cid”の場合と同じことが起ったのである。1675年、Corneille に好感を持っていなかった abbé de Villiers が、“役者達は Polyeucte によって、彼らがそれ以後上演したどんな悲劇と較べても、よく多くの収入を得た”²⁸と証言している。

Vion d'Alibray のように、作品の宗教性に感嘆の意を示す人物もあるが、一般の観客は Saint-Evremond 同様、Pauline と Sévère の恋物語に心を奪われたらしい。この傾向は18世紀まで続く。Voltaire の時代の philosophes の目には、Polyeucte は狂信家以外の何者でもない。Pauline が愛すべきは夫でなく、かつての恋人であった。“De Polyeucte la belle âme/ Aurait faiblement attendri,/ Et les vers chrétiens qu'il déclame/ Seraient tombés dans le décri,/ N'eût été l'amour de sa femme/ Pour ce païen favori,/ Qui méritait bien mieux sa flamme/ Que son bon dévot de mari.”²⁹ “Polyeucte”がキリスト教精神を体現する悲劇として評価されるには、19世紀の Chateaubriand 或いは更に下って Péguy の批評を待たねばならない。

5

Polyeucte がキリスト教の Dieu に心ひかれたことは、Corneille の過去の作品の主人公像を吟味する時、決して唐突な印象を与えない。Dieu は従来の主人公達が経てきた苦悩、葛藤を解決するものとして現れる。この意味で、Polyeucte とそれ以前の作品間にある外観上の断絶は、否定されねばならぬ。彼らの苦悩とは何か？ 現世で人間の欲望が追い求める目的。女性との愛、勇気の代償としての名誉、権力。これらが与える満足は時と共に減び、後には幻滅しか残らぬという苦い認識である。だから、しばしば彼らは理想を外部の対象でなく、自己の内部に、つまり自己の情念に打克ち、精神的自由を得ること。Descartes 的な libre arbitre を獲得することに求めた。

このような Corneille 的 héros の原型として登場するのが Alidor である。奇矯な主人公は熱愛する恋人 Angélique を進んで友人に譲ろうとする。情熱の奴隷となる危険を感じたからだ。彼の理想は常に libre arbitre を保持することである。“Je veux la liberté dans le milieu des fers.”^⑳ しかるに現状は正反対である。“Et de tous mes soucis la liberté bannie/ Me soumet en esclave à trop de tyrannie.”^㉑ 又彼は愛や美の移ろい易さに不信感を持っている。Angélique の美貌、彼女への愛はいつまで続くことができるか？ 友人が、Alidor と彼女の結婚を仄かした際の、主人公の答。“Mais sa beauté peut-elle autant durer que lui (=noeud)?/ Et peu qu'elle dure, aucun me peut-il dire/ Si je pourrai l'aimer jusqu'à ce qu'elle expire?”^㉒ それは、この世のすべてのものが時と共に変化してやまぬというバロック的感覚の表明でもある。“Du temps, qui change tout, les révolutions/ Ne changent-elles pas nos résolutions?”^㉓

叙事詩的な雄大さを持つ Curiace 三兄弟との決闘の後、思いもかけず Horace を襲った不幸。しばしば unité d'action の欠如を指摘される Horace の妹殺しの悲劇的意味は何か？ いかにも勇者と言えども、己が榮譽、己が力を永久に享受することはできぬという人間存在の脆さを示す。五幕の

Horace の慨嘆 “Puisque pour mon honneur j' ai déjà trop vécu.”⁸⁴ 救国の英雄として honneur の絶頂を極めた今となつては、没落の余生しか残されていないという嘆き。妹殺しが早くも彼の栄光に暗い陰を落とす。

“Cinna” の Auguste。幾多の人命を犠牲にして昇りつめた帝位から、彼は何を得たか？心の休らぎを奪う心労、謀叛の恐れ、絶えざる疑心暗鬼。
 “D’effroyables soucis, d’éternelles alarmes,/ Mille ennemis secrets, la mort à tous propos,/ Point de plaisir sans trouble, et jamais de repos.”⁸⁵ 彼は今や帝位を降りることに希望すら感じている。“Et monté sur le faite, il aspire à descendre.”⁸⁶ 悲劇は彼が最も信じていた人々、Cinna, Emilie, Maxime の謀叛によってクライマックスに達するだろう。

主人公に限定しないなら、“Le Cid” の Don Diègue も又、栄光の空しさ、condition humaine の無常を味わねばならなかった。Gormès 伯の平手打ちを受けながら、彼には恥をそそぐ力がない。白髪の日まで生き長らえたのは、若き日の勇士としての名誉を、このようにして汚すためだったのか？“N’ai-je donc tant vécu que pour cette infamie ?/ Et ne suis-je blanchi dans les travaux guerriers/ Que pour voir en un jour flétrir tant de lauriers ?”⁸⁷

Polyeucte の Dieu は、かかる無常から主人公を救済するものとして現れる。Dieu の約束する至福は、時と共に変化し、実現と同時に幻滅を招きはしない。“Un bonheur assuré, sans mesure et sans fin,/ Au-dessus de l’envie, au-dessus du destin.”⁸⁸ だが Dieu の意に適おうとすれば、愛欲も富も地位も振捨てねばならぬ。“Négliger, pour lui plaire, et femme, et biens, et rang,/ Exposer pour sa gloire et verser tout son sang.”⁸⁹ 奇しくも劇中二度に渡って繰返されるこの台詞こそ、Polyeucte が体験する試練の性質を明らかにしている。まず冒頭の場面で、Néarque が主人公に、悲劇のテーマを予告するかのようになり、2幕6場では偶像破壊の決意を固めた主人公が、逆に Néarque 説得のために、同じ台詞を吐く。欲望からの離脱は、4幕2場の名高い Stances を通じて、Polyeucte の内で揺ぎ

ないものとなる。“Que voulez-vous de moi, flatteuses voluptés ? /Honteux attachements de la chair et du monde (….) Allez, honneurs, plaisirs, qui me livrez la guerre”^⑩ :

Polyeucte を現世に執着させる最大の理由が Pauline にあることは言うまでもない。彼の苦悩を一層鮮やかに描き出すために、Corneille が舞台の日付を彼らの結婚後わずか二週間目に置いたことは興味深い。彼の作品中でも、恐らく“Le Cid”を除いて例をみない濃やかな愛情の描写。取わけ bienséances によって抑制された文体の間からも漂ってくる官能の香り。これらを作者自身の感情生活の投影と見るべきか？多分1641年の始め、彼は Marie de Lampérière と結ばれた。Fontenelle の伝える所によれば、Polyeucte 同様彼はこの結婚を待ち焦がれていたが、娘の父が反対したため、Richelieu の手を患わせねばならなかった^⑪。“Polyeucte”の初演を Stegmann や Lancaster の主張する年代まで溯らせるなら、この見方は一層妥当なものとなろう。

4幕4場で処刑を覚悟した主人公は、妻の幸福を思い、彼女を Sévère に譲る。キリスト教的謙讓の美德の発露という高貴な外観を備えたこの行為は、同時に Alidor の残酷な仕打ちを連想させる。自分を愛している女を、一個の物の如くに他の男の手に委ねるのだ。又それが惹起する劇的效果において、Rodrigue が血糊のついた剣を差し出し Chimène に自分を殺せと迫る場面を思わせる。どちらの場合も主人公は、女性が自分を愛していることを知りながら、彼女らの到底承服し難い行為を強いる。その結果女達は主人公の命に従わないことで、彼を愛していることを一層明らかにする。Rodrigue に対する Chapelain の非難は必ずしも的外れと言えない。“Chimène が自分の手で仇を討つ決意をすると本気で信じている様には見えない以上、彼は彼女が当然拒むであろう刃を、猶予を置かず自身の手で己が身に向けるべきであった。死ぬために、これほど拙劣な手段を取ったのを見て、彼が死ぬことを望んでいなかったことは明らかである。”^⑫では何故 Rodrigue は殺せと強要するのか？Nadal の穿った解釈によれば、

Chimène に、復讐の掟に従うことができぬ。父親の殺害者を宿命のように愛していると、言わせるためだ。意志も義務も忘れ、彼の足下に屈したこの愛の戦利品を前にして、Rodrigue は征服者の喜びに満たされる。“実際には彼はここで犠牲者に対する拷問者の役割を果たしている。彼は彼女の口から amour に打ち負かされたという告白を得るまでさいなみ続ける… Chimène が自由で誇り高くあっても彼にとって失われた存在であるより、卑しめられていても自分のものであると知る方を彼は好む。”

Polyeucte についても同じことが言えるか？愛の証しを強要する無意識的衝動が潜んでいるか？無論 Rodrigue の心底に sadique な arrière-pensée を仮定する Nadal 流の解釈が、一般の承認を受けている訳ではなく、主人公の高貴な騎士道精神を卑しめるという誇りを免れぬであろう。同様にここでは、Polyeucte のキリスト者としての美德に疑いをはさむことになる。従って今の所は、彼の行為が一種の矛盾した側面を持つように見える。崇高な美德の表現であると共に、ほの暗い本能の詐術を感じさせると、指摘するにとどめよう。

Polyeucte の結末は、Alidor の挫折がハッピーエンドを得たケースと言える。Alidor が Angélique を友人に譲るのは、情熱の蹂躪に身を任すのを恐れたためだった。二度に渡る企みが失敗に帰した時、彼は以前にもまして彼女への愛を痛感する。だが、Angélique にとって、彼の行いは裏切り以外の何物でもない。二人の間に永遠の別離が訪れる。これに対し、同じように Pauline を愛しながら Sévère に譲った Polyeucte は、彼女の改宗により共通の理想、Dieu の下に結ばれることになる。もはや彼女は、彼が恐れねばならぬ “flatteuses voluptés” でも “honteux attachements de la chair” でもない。彼は Alidor と同様、情熱と官能の危機を経た後、Alidor の失敗とは対照的に、女性への愛と情念の支配という両立し難い理想の実現に成功したのである。

以上我々は、Corneille が chrétien を主人公とする戯曲を書く必然性が、“Polyeucte” 以前の作品に既に存在していることを明らかにした。主

人公が Dieu にひかれた動機において、又 Pauline との愛の葛藤において、彼は過去の人物達の色濃い痕跡をとどめている。

※ ※ ※

Adam は Polyeucte が偶像破壊を決意する際の、決意の仕方が不自然であると指摘している。Polyeucte が洗礼を受けて戻って来る。Pauline は夢の一部が現実となって不安におののいている。彼は妻の不安を鎮め、愛の言葉を吐く(2幕4場)。使いが神殿に来るよう Polyeucte を招くと、彼は“Y venez-vous, Madame?”(629)と妻に尋ねる。更に Sévère との確執を恐れる彼女に“Nous ne nous combattons que de civilité”(636)と答えて別れる(2幕5場)。この後で Polyeucte の態度が豹変する。640行目の台詞を皮切りに、643行目で遂に偶像破壊の本心を吐露する。彼の決意はどの箇所でなされたか？洗礼の直後、つまり2幕4場で舞台に登場した時既に決意を固めていたとしたら、彼の妻に対する劣りの言葉は欺瞞に満ちたものになる。なぜなら妻の夢が間もなく正夢となることを知っているのは、誰より彼自身のはずだからだ。まして、その彼が妻を神殿に誘うような台詞を吐くだろうか(629)?もし妻が列席を承諾していたら、彼女の不安を和らげた直後に、彼女の眼前で彼女を絶望のどん底に叩きこむ行為に及ぶ積りだったのか？到底信じられない。従って彼の決意は636行から640行の間に行われたと結論する他ない。この突然の決意が、まさしく grâce の作用であり、“殉教へのこの予期せざる突然の渴望は神学的真理であると共に、別次元の心理学つまり聖者の心理学においては、心理学的真理でもある”^④と認めるとしても、聖者ならざる通常の観客の“esprit を完全には満足さし得ない”^⑤恨みを残す点は否定できない。我々は卒直に Adam の見解に賛成しよう。この不自然さは、宗教劇という特殊なテーマがもたらした“Corneille をもってしても克服しえなかった余りに困難な障害”^⑥であった。

ただ作品構成から言えば、この不合理も黙認できる、ささやかな欠陥にすぎない。主人公の偶像破壊なくしては“Polyeucte”の悲劇は成り立たな

い。しかし悲劇導入に不可欠であることと、観客を感動させることとは別問題である。彼の行為の劇作術上の意義は、殉教精神の高揚により観客を感動させる、それ自身で舞台の山場をなすと言うより、Polyeucte と Pauline, Pauline と Sévère の間に複雑な緊張関係を作り出し、4幕以降の感動的な場面を準備することにある。“Polyeucte の洗礼と偶像破壊という向こう見ずな行いは Pauline と Sévère の関係を複雑かつ悲壮にするためののみ存在しているように思える。”⁴⁷我々は作品の興味が Pauline と Sévère の関係にだけ存するとは考えないが、その点を除けば、Schlumberger の意見に同意しよう。そして Corneille が“Le Cid”の“Examen”で駆使したのと同じ論法で“Polyeucte”を弁護しよう。Chimène が父親の死の直後、2度に渡って Rodrigue を自分の部屋に迎え入れたことは vraisemblance に反する。だが D'Aubignac によれば、“彼らの会話は、まことに美しい数々の思いに満ちているので、多くの人たちはこの欠点に気づかなかつたし、まだ気づいた人も黙許したのである。”⁴⁸Corneille の結論。“アリストテレスは不合理、非常識なことでも、それが観客に歓迎されると思われる時は、詩のなかに残しておかなくてはならぬと言う。この場合、観客が目くらませられるほどの光彩でこの不合理なことを包み隠すのが詩人のなすべき務めである。”⁴⁹Corneille は4幕3場或いは6、7場の輝やかな光彩により、“詩人のなすべき務め”を見事に果たしたのでなかったか？

Voltaire は Fontenelle の逸話を踏承する形で、Hôtel de Rambouillet 特わけ Grasse の司教 Godeau が、Polyeucte の偶像破壊を非難したと伝えている。“人々が言うには、これは軽はずみな熱狂であり、*évêques* や *synodes* は法と秩序に対するこのような侵犯をはっきり禁じていた。”⁴⁹Fontenelle の伝記では、Hôtel de Rambouillet が“Polyeucte”の *christianisme* に対し、いかなる理由で反感を抱いたかが示されていない。Voltaire はそれを明らかにしている。反感の理由は、たとえば D'Aubignac が言うように、*fictions* と神学上の *vérité* とを混在させることによ

り、観客の信仰心を損うといった宗教劇一般に該当するものではない。我々の目に最も宗教的と思える行為そのものが、聖職者或いは教会の名に於いて糾弾されている。

Fontenelle 同様 Voltaire の逸話も信憑性の程は定かでない。ただ、このような非難を可能ならしめる歴史的事実として、305年の Illibéris の公会議で“偶像を破壊し、そのために殺害された者は、殉教者の列に加えられないであろう。”旨決定されている。偶像破壊の禁止は、破壊者が拷問に耐えられず、異教に改宗する例が多く見られたかららしい。伝記中の Polyeucte が聖者の列に加えられたのは、例外的なケースであった。

“法と秩序”を侵し、ordre de l'Eglise にさえ違反しかねない Polyeucte の偶像破壊。愛する妻を捨て家庭を破壊する彼の殉教に対し、各世紀はそれぞれの立場から批判の矢を放つ。Voltaire は philosophe にふさわしい合理精神を発揮し、Polyeucte が過激な行為に走らず、祭礼の出席を見合わせるにとどめたら、劇はずっと興味深くなったろうと述べる。19世紀のブルジョワ的良識は Brunetière に“Polyeucte の《義務》が殉教に身を捧げるため、宣誓された婚姻の誓い、教会の命に反してまで Pauline を捨てることであったと主張する者が誰かいるか？逆にあらゆる点から考慮して、彼の真の《義務》はこの殉教を避けることでなかったか？”と言わせる。現代のカトリック作家 Claudel は、Brasillach にあてた書簡中、激烈な調子で作品のキリスト教精神を否定する。“私は Corneille が最大のキリスト教詩人であるという貴君の断定に驚いています…Polyeucte は馬鹿げた空感張り屋以外の何者でもありません。”彼の作品は、“キリスト教の否定そのものであり、福音書の光明の一筋すらそこには差しこまない…”

これらの批判の中で特に注目をひくのは、最後の Claudel の場合であろう。“Polyeucte”に限定しなければ、この種の批判は既に17世紀の jansénistes 達に見い出される。Corneille の作品が、キリスト教精神と相いれぬ orgueil や amour de soi を誇示するものとして、非難を浴びている。“あらゆる劇詩人の中で多分最も honnête homme である Corneille のす

べての作品は、傲慢さ、野心、嫉妬、復讐心、特に激しい自己愛そのものであるローマ的美徳の生彩に富んだ表現にすぎぬ。⁵⁵”

しかし“Polyeucte”が真にキリスト教精神を体現した悲劇か否かを、ここで論ずることは差し控えたい。本小論で扱うには龐大すぎるテーマだからだ。17世紀について、大変荒っぽい言い方をすれば、前半では christianisme はストア精神と融合する形で、互いに排斥することなく両立できたのに対し、時代が下るにつれ、特に jansénistes によって、両者の矛盾した性格が強調される。先の引用で Nicole が“ローマ的美徳”に示している敵意によっても、又 Pascal の“Entretien avec M. de Saci”等からも、それが窺えよう。このような時代思潮の変化や christianisme 内の様々な分派の思想の考察は、もともとストア的性格の強い Corneille の作品の宗教性を判断する上で不可避である。たとえば既に紹介したように、彼の同時代人として、Gaston de Renty, Jean de Bernières 等の Polyeucte との精神的類縁性を思わせる fanatiques も存在していた。問題を17世紀に限らぬとすれば、判断の基準となるキリスト教精神の定義は一層困難な、ほとんど不可能なものになろう。

Jules Lemaitre は、“一つの観念、一つの信仰にとり憑かれ、そのために常に自分自身を犠牲にするばかりか他人をも犠牲にする用意のある人物”、“そう言いたければ fanatique”、“非常に特殊な、結局は非常に高貴な種類の魂の完成された典型⁵⁶”である Polyeucte を、世紀末のニヒリストや無政府主義者 クロポトキンのイメージとだぶらせている。André Gide も同種の感想をもちた。“Polyeucte はキリスト教徒としてよりむしろ革命家として振舞っている⁵⁷。” 炯眼な作家達の直観は、Polyeucte の過激な行いに現代的興味を添えるものと言えよう。彼の内に一種の革命家気質を認めることが、彼のキリスト者としての資格を損うことには無論なるまい。

※ ※ ※

有名な Sainte-Beuve 説“Corneille est de Port-Royal par Polyeucte.”⁵⁸

に関連し、作品中に表れる *grâce* と自由意志の関係について一言しておく。*jansénisme* の主要な教理である “*grâce efficace*” では、この恩寵は人間の意志を決定する形で働く。意志がこれに抗うことはできない。ところが1幕1場の *Néarque* の台詞を例にとっても、そこで述べられている神学理念は *jansénisme* と異なる。“Il (=Dieu) est toujours tout juste et tout bon; mais sa grâce/ Ne descend pas toujours avec même efficace;/ Après certains moments que perdent nos longueurs,/ Elle quitte ces traits qui pénètrent les cœurs:” 妻の涙にひかされて、洗礼を延期しようとする *Polyeucte* に、ぐずぐず時を費している間にも、恩寵の効果が弱まると *Néarque* は説く。恩寵が *effectivement* に働くために、人間の意志の同意を必要とするこの考え方は、*molinisme* の立場に近いと言えよう。

Jansénius の “*Augustinus*” の公刊は1640年であり、*Corneille* が “*Polyeucte*” 執筆当時論争は開始されたばかりであった。門外漢の彼が論争内容に精通していたと思われぬ。又その頃 *Port-Royal* は他よりも信仰に燃えた一修道院という以上の存在でなかった。*jansénisme* と *jésuitisme* の対立が表面化した後、1659年の “*Œdipe*” で *Corneille* は *jansénisme* 的宿命観に対し、明らかに自由意志を擁護している。*Sainte-Beuve* は、この *Thésée* の tirade を自己の主張に矛盾すると判断したせいか、note に書きしるすにとどめた^⑤。

6

Pauline の改宗の理由を明らかにするには、彼女が *Polyeucte*, *Sévère* に抱いた愛情心理を分析する必要がある。*Madame de La Fayette* の小説に酷似した三角関係に光をあてねばならぬ。ルイ十四世の王太子妃は観劇の後、“Voilà une honnête femme qui n’aime pas son mari.” と *Pauline* を評した^⑥。だが *Corneille* のヒロインは、*Princesse de Clèves* と異り、夫を愛することで終る。

まず Sévère との関係から検討する。二人の愛は amour héroïque のモラルに則している。amour héroïque とは Nadal が Corneille の作品や当時の上流社会の mœursなどを分析、抽出した gloire, honneur に基く恋愛の観念である。Pauline を Sévère にひきつける魅力は、何より彼の“mérites”から生じる。“…et jamais notre Rome/ N'a produit plus grand cœur, ni vu plus honnête homme.”^{②③} 2幕2場で Sévère はペルシア戦役最大の武勲者、Décie 皇帝の寵臣として、輝かしい gloire に包まれて蘇る。英雄のこの prestigeこそ、就中 Pauline を眩惑し、かつての恋の炎に油を注ぐものなのだ。“Un je ne sais quel charme encor vers vous m'emporte;/ Votre mérite est grand, si ma raison est forte:/ Je le vois, encor tel qu'il alluma mes feux,/ D'autant plus puissamment solliciter mes vœux/ Qu'il est environné de puissance et de gloire,/ Qu'en tous lieux après vous il traîne la victoire,…”^{②④} だが Sévère の gloire が彼女を魅惑したように、彼女も己れの gloire を守らねばならぬ。夫への貞節を貫いて、vertueuse な女としてとどまらねばならぬ。それこそ amour héroïque のモラルが要請する所であり、尊敬する Sévère にふさわしい女であり得る唯一の手段、彼の愛に答える証しなのだ。“Et voyez qu'un devoir moins ferme et moins sincère/ N'aurait pas mérité l'amour du grand Sévère.”^{②⑤} かくて“Le Cid”の読者には既に馴染み深い場面、恋人同志があたかも闘技のように、devoir に対する忠誠において、générosité において、魂の崇高さにおいて相手にひけをとるまいと競い合う場面が展開される。一度“gloire”という魔法の呪文が発せられるや、Pauline と共通のモラルを生きる Sévère は、己れの幸福を諦める他ない。“Je veux guérir des miens (=mes maux): ils souilleraient ma gloire.—Ah! puisque votre gloire en prononce l'arrêt,/ Il faut que ma douleur cède à son intérêt.”^{②⑥}

4幕6、7場でも同じ場面が繰返される。Polyeucte が妻を Sévère に任ねた時、消えかかった希望の灯が再び彼の心に点る。だが予期しない

Pauline の拒絶。彼女は Sévère の名誉心、彼の vertu に訴えて、夫の助命を願う。“Je sais que c'est beaucoup que ce que je demande; / Mais plus l'effort est grand, plus la gloire en est grande.(…) C'est un trait de vertu qui n'appartient qu'à vous.”⁶⁶ 再び自分の幸福を犠牲にして、Sévère は恋人の願いを叶えてやるだろう。何のために？彼女にふさわしい男であるという gloire を得んがため。“La gloire de montrer à cette âme si belle/ Que Sévère l'égale, et qu'il est digne d'elle;”⁶⁷

だが誤解してはならない。17世紀の観客や Voltaire の世代を感激させた Pauline と Sévère の恋。gloire を重んじ、devoir の名によって情熱の支配を試みるこの種の恋は、必ずしも Corneille の独創ではない。“Polyeucte” の2幕2場が、Camus の“Alexis”を恐らく source としていることは述べた。Marcel を愛しながら、Hermin と結婚した Colombe の言葉 “Dites à Marcel que j'honoray tousjours ses merites; si j'eusse eu le pouvoir de choisir quelqu'un, mes affections m'eussent donnée à luy; mais ne pouvant faire que ce que je dois et me devant toute à ceux qui m'ont donné l'estre, il faut que je suive leur volonté.”⁶⁸ 一方 Pauline が Sévère に語る台詞 “Si le ciel en mon choix eût mis mon hyménée/ A vos seules vertus je me serais donnée, (…) Mais puisque mon devoir m'imposait d'autres lois,/ De quelque amant pour moi que mon père eût fait choix(…) j'aurais obéi,…”⁶⁹ 二つのセリフの比較だけでも類似は明白であろう。

“Polyeucte” の独創性はむしろ、Pauline の夫に対する愛情心理の展開に求められねばならない。しかし、その検討に入る前に Sévère の人物像を素描しておく。彼には二つの顔がある。二つながら Polyeucte と対照的である。まず Pauline が “trop parfait amant” と呼ぶ顔。彼は一種の女性崇拜者である。Polyeucte の Dieu に対し、Sévère の神は Pauline その人である。“Je n'aurais adoré que l'éclat de vos yeux,/ J'en aurais fait rois, j'en aurais fait mes dieux;”⁷⁰

第二に彼は Voltaire 好みの *tolérance* を備えた、懐疑主義者である。信仰の自由を認めている。“J’approuve cependant que chacun ait ses dieux.”^① ここでも Polyeucte の *fanatisme* と好対照をなす。彼の懐疑的知性は、初版本の次の台詞に、特に顕著に現れる。“Peut-être qu’après tout ces croyances publiques/ Ne sont qu’inventions de sages politiques, / Pour contenir un peuple ou bien pour l’émouvoir, / Et dessus sa faiblesse affermir leur pouvoir;”^② 宗教を民衆を掌握、扇動するための賢明な政治家の詐術とするこの件が、後に削除された理由として、Loukoviitch は *libertin* の危険思想に通じるものがあったので、作者が恐れをなしたせいだと推測している。^③

※ ※ ※

Pauline は義務から夫を愛そうとする。“Et moi, comme à son lit je me vis destinée, / Je donnai par devoir à son affection / Tout ce que l’autre avait par inclination.”^④ 父親が与えた夫に忠実であろうとする態度は、封建モラルの秩序を厳守するものと言えよう。だが、Polyeucte の偶像破壊が告げられる 3 幕 2 場で、彼女の愛のモラルに微妙な変化が生ずる。Stratonice は言う。“Ce courage si grand, cette âme si divine, / N’est plus digne du jour, ni digne de Pauline.”^⑤ 相手にふさわしくあることが決定的意味を持った Pauline と Sévère の恋なら、*dieux* と皇帝に反逆を企て、卑しむべき邪教に身を投じた Polyeucte, この恥辱にまみれ *gloire* を喪失した男は、それだけで Pauline の愛に値しない人間となるはずであった。だが Pauline の答。“Quelque chrétien qu’il soit, je n’en ai point d’horreur; / Je chéris sa personne…”^⑥ 彼女は夫の “*mérites*” ではなく、“*sa personne*” そのものを愛していると告白する。このようにして彼女は封建モラルが許さぬ愛を生き始める。“Et saintement rebelle aux lois de ma naissance,”^⑦ *amour héroïque* から遙かに人間的な愛への移行が始まる。

4 幕 3 場。夫の翻意を促そうと、Pauline は説得を繰返す。名門の血を

ひく彼の輝しい将来。王に民衆に国家に負っている義務。遂には Sévère が滞在する一時だけでも異教徒の振りをしてくれと願う。だがこれらの説得も夫の信仰心を揺るがすことはできない。彼女は最後の手段、二人を結ぶ愛の絆に訴える。彼女の語調は変り、劇中始めて夫を *tutoyer* する (1237行以降)。“C'est donc là le dégoût qu'apporte l'hyménée ?/ Je te suis odieuse après m'être donnée!” 女性の口から仄めかされた肉の思ひ出。裏切られた魂と肉体の恨みの叫びは、古典主義の文体としては驚くべき大胆さ “audaces bouleversantes” に満ちている。

Polyeucte への思いがいかにか高まったように見えても、彼女が夫の理想に無理解であることに変りない。“Voilà de vos chrétiens les ridicules songes;”, “Imaginations!”, “Etrange aveuglement!”。

4幕4場は、彼女にとって夫の決定的背信を意味するはずであった。だが奇妙なことに、Pauline の女性心理は、Polyeucte が彼女から離れようとすればする程、彼の後を追わせることになる。そして夫が彼女を Sévère に任ねたこの瞬間に、彼女の心は決定的に Polyeucte に傾く。かつての恋人に夫の助命を請う彼女は、二つの愛の間を彷徨い、“Et quoi que le dehors soit sans émotion,/ Le dedans n'est que trouble et que sédition.” と告白した2幕の Pauline ではない。“Mon Polyeucte touche à son heure dernière;” Polyeucte の前に始めて所有形容詞が冠せられる。彼女は決然たる態度で、Sévère の名誉心、“parfait amant” を動かす最大の秘法に訴えて目的を遂げる。

5幕の Pauline には何のためらいもない。どこまでも夫の後に従うだろう。“Je te suivrai partout, et mourrai si tu meurs.” 彼女の改宗はこの台詞の直後に起る。作者の意図した如く、これを grâce の作用と考えるべきか? 殉教し天に昇った Polyeucte の祈り、Péguy 流に言えば “Eglise triomphante” の “Eglise militante”, “Eglise souffrante” への祈りが叶えられたせいか? “Je vois, je sais, je crois, je suis désabusée:” だが、Pauline の開眼を告げるこの台詞に、Adam は辛辣な判断を下す。“これ

は単なるレトリックにすぎない。彼女はまったく何も見ておらず、一時間前より少しでも多くのことを知っている訳ではない。” 4幕3場でPaulineが christianisme に示した完全な無理解。それ以後彼女が何を知り得ただろう？目の当りにしたのは夫の死だけである。

Adam の判断は常識に適っている。一方作者が試みたのは、Pauline の改宗を神学上の真理に立脚させることであった。次元は異なるが共に真理である。我々は次のように言おう。奇跡が存在しなくとも、Pauline は夫の後に従ったであろう。grâce が下る以前に彼女の心理の軌跡は決定されていたからである。彼女は夫を愛した。夫は殉教した。この世で愛の叶わなかった彼女は、夫の理想を共有することを望んだ。christianisme の真理が啓示されたか否かは我々の関心をひかない。肝心なのは彼女がそれを望んだことだ。もし、宗教劇の枠内に収めようとする Corneille の細心の努力を無にすることにならないなら、我々は Pauline の改宗が、grâce による真理の啓示ではなく、地上の愛故になされたと断言してはばからない。彼女が Sévère より夫を選んだ時、つまり amour héroïque とは異質の愛、現世での gloire の光彩を奪われた墮ちた男への愛を選んだ時、既に改宗は用意されていたのである。

7

Félix の改宗を Pauline のように心理的側面から説明することは不可能である。超自然的な grâce の作用と言う他ない。この場合 grâce の出現は、神学上の必然であると共に、劇作術上の要求も満足させている。Molière が喜劇の幕を降すため、しばしば奇跡としか言いようのない偶然を利用したように、Corneille は grâce を利用する。Polyeucte の殉教で悲劇の大筋は終わったにしても、Pauline, Sévère, Félix の行方に観客の興味は集まっている。もし、Pauline と Félix の改宗がなかったら、作者は短時間の間に、“観客の好奇心を余す所なく満足させ、劇を完成した状態にして舞台から引き下ろすことは困難であつたらう。”

又アリストテレスの詩学に関連して触れた如く、観客に主人公への同情より迫害者への憎悪の方を強く感じさせぬためにも、Félixの改宗は有効であった。“(Félixに対する)この嫌悪は(…)劇の結末で起る奇跡による改宗によって、Félixと観客を十全に和解さすことの妨げにはならない。”⁹⁹

結 論

我々は、Corneilleのtragédie chrétienneを、専らPaulineを巡る三角関係の恋愛劇という観点から検討した。この見方は17、8世紀のフランスの観客には既に周知のものであった。だが彼らの共感にはPauline-Sévèreのカップルに集中する。Polyeucteは恋の成就を妨げる妨害者としか見做されない。我々の視点はこれと異なる。いささか précieuxで時代がかったPauline-Sévèreの恋ではなく、PaulineとPolyeucteの関係にこそ、作品のoriginalitéは存在する。夫の愛に導びかれて改宗に到るPaulineの心理描写は、作品が荒唐無稽な奇跡のドラマに墮すことを救った。

Polyeucteの決意とFélixの改宗には多少の不自然さが残る。我々はこれを劇作術の面から弁護した。Polyeucteの偶像破壊はfanatismeの非難が成り立たなくもない。だがこのfanatismeもLemaitreやGideの視点に立つ時、かえって現代的興味をかきたてる。

恋愛劇の観点を強調したからと言って、作品の宗教的意図まで否定する訳ではない。janséniste達のCorneille非難、又Claudielの“Polyeucte”への言及が、この作品とキリスト教精神の矛盾を示唆しようと、それは彼らとCorneilleのキリスト教観の違いを示すだけで、直ちに“Polyeucte”の宗教性を否定するものではない。作者の意図に関しては、“Ce n'est qu'une pièce de théâtre (…)¹⁰⁰ mais qui l'entretiendra de Dieu:”というCorneilleの言を素直に信じて良からう。思寵と自由意志の関係について、jésuite達の正統的神学の枠組を守りながら、豊かな人間的感情を盛り込むことに成功したのである。“tendresses de l'amour humain”と“fermeté du divin”の快い混合が、“信心家も社交界の人士も共に満足させた”ので

㊦
ある。

〔注〕

- ① Antoine Adam : Histoire de la littérature française au XVII^e siècle (del Duca, 1968) t.1, pp. 537—538.
- ② Cf., Octave Nadal : Le sentiment de l'amour dans l'œuvre de Pierre Corneille (Gallimard, 1948) p. 186.
- ③ Œuvres de P. Corneille publiées par M.-Ch. Marty-Laveaux (Hachette, 1862) t.10, pp. 438—440.
- ④ Cf., René Pintard : Autour de Cinna et de Polyeucte (R. H. L. F., juil. 1964) pp. 385—390.
- ⑤ Cf., André Stegmann : L'héroïsme cornélien (Armand Colin, 1968) t. 1, pp. 88—93.
- ⑥ Cf., A. Adam, op. cit., p. 536.
- ⑦ Cf., Henry Carrington Lancaster : A history of french dramatic literature in the seventeenth century (Gordian Press, 1966) Part II, Vol. I, p. 320.
- ⑧ Abrégé du martyre de Saint Polyeucte, Théâtre complet de Corneille (Pléiade, 1950) t. 1, p. 914.
- ⑨ Cf., A. Adam, op. cit., p. 537.
- ⑩ M. Magendie : Des sources inédites de Polyeucte (R. H. L. F., 1932) p. 385.
- ⑪ Cité par J. Calvet : Polyeucte de Corneille (Mellottée, 1934) p. 59.
- ⑫ Charles Dédéyan : Les débuts de la tragédie cornélienne et son apogée d'après Polyeucte (Centre de Documentation Universitaire, 1963) p. 37.
- ⑬ Ibid., p. 40.
- ⑭ Ibid., p. 40.
- ⑮ Vie de Corneille par Fontenelle, Œuvres complètes de Corneille (Aux Editions du Seuil, 1963) p. 23.
- ⑯ Lancaster, op. cit., p. 329.
- ⑰ Cité par Kosta Loukovitch : L'évolution de la tragédie religieuse classique en France (Droz, 1933) p. 271.
- ⑱ Cité par René Bray : Formation de la doctrine classique (Nizet, 1966) p. 293.
- ⑲ Ibid., p. 293.

- ⑳ Cité par R. Bray, *op. cit.*, p. 293.
- ㉑ Boileau : *Œuvres complètes* (Pléiade, 1966) p. 173.
- ㉒ Cité par G. Mongrédien : *Recueil des textes et des documents du XVII^e siècle relatifs à Corneille* (C. N. R. S., 1972) p. 98.
- ㉓ *Polyeucte*, III, 2, 781—784.
- ㉔ cité par J. Calvet, *op. cit.*, p. 296.
- ㉕ *Ibid.*, p. 297.
- ㉖ *Œuvres de P. Corneille* (Marty-Laveaux), *op. cit.*, t.12. p. 492.
- ㉗ *Discours de la tragédie, Théâtre complet* (Pléiade), *op. cit.*, p. 35, p. 37.
- ㉘ *Œuvres de P. Corneille*, *op. cit.*, t. 3, pp. 467—468.
- ㉙ *Épître dédicatoire de Zaïre, Œuvres complètes de Voltaire* (Garnier Frères, 1877) t. 2, pp. 539—540.
- ㉚ *La Place Royale*, I, 4, 204.
- ㉛ *Ibid.*, 217—218.
- ㉜ *Ibid.*, 228—230.
- ㉝ *Ibid.*, 231—232.
- ㉞ *Horace*, V, 2, 1582.
- ㉟ *Cinna*, II, 1, 374—376.
- ㊱ *Ibid.*, 370.
- ㊲ *Le Cid*, I, 4, 238—240.
- ㊳ *Polyeucte*, IV, 3, 1193—1194.
- ㊴ *Ibid.*, I, 1, 75—76. II, 6, 687—688.
- ㊵ *Ibid.*, IV, 2, 1106—1107, 1109.
- ㊶ Cf., Georges Couton : *Corneille* (Hatier, 1969) p. 58.
- ㊷ *Œuvres de P. Corneille*, *op. cit.*, t.12, p. 477.
- ㊸ O. Nadal, *op. cit.*, p. 171.
- ㊹ G. Couton, *op. cit.*, p. 80.
- ㊺ A. Adam, *op. cit.* p. 538.
- ㊻ *Ibid.*, p. 538.
- ㊼ Jean Schlumberger : *Plaisir à Corneille* (Gallimard, 1936) p. 86.
- ㊽ *Examen du Cid, Théâtre complet* (Pléiade), *op. cit.*, t.1, p. 702.
- ㊾ *Voltaire : Œuvre complètes*, *op. cit.*, t. 31, p. 394.
- ㊿ C. Dédéyan, *op. cit.*, p. 31.
- ㉑ Cf., K. Loukovitch, *op. cit.*, p. 261.
- ㉒ *Voltaire*, *op. cit.*, t. 31, p. 394.
- ㉓ Ferdinand Brunetière : *Les époques du théâtre français* (Calmann Lévy,

- 1892) p. 69.
- ⑤4 Cité par Serge Doubrovsky : Corneille et la dialectique du héros (Gallimard, 1963) pp. 228—229.
- ⑤⑤ Cité par G. Couton : Réalisme de Corneille (Les Belles Lettres, 1953) p. 90.
- ⑤⑥ Jules Lemaitre : Impressions de théâtre (Boivin & C^{ie}) t. 1, p. 29.
- ⑤⑦ Cité par Maurice Descotes : Les grands rôles du théâtre de Corneille (P. U. F., 1962) p. 240.
- ⑤⑧ Sainte-Beuve : Port-Royal (Pléiade, 1953), t.1, p. 183.
- ⑤⑨ Polyeucte, I,1, 29—32.
- ⑥0 Sainte-Beuve, op. cit. pp. 223—224.
- ⑥1 C. Dédéyan, op. cit., p. 24.
- ⑥2 Polyeucte, I, 3, 181—182.
- ⑥3 Ibid., II, 2, 505—510.
- ⑥4 Ibid., II,2, 521—522.
- ⑥5 Ibid., II, 2, 550—552.
- ⑥6 Ibid., IV, 5, 1355—1356, 1358.
- ⑥7 Ibid., IV, 6, 1391—1392.
- ⑥8 M. Magendie, op. cit., p. 387.
- ⑥9 Polyeucte, II, 2, 465—466, 471—472, 476.
- ⑦0 Ibid., IV, 5, 1329—1330.
- ⑦1 Ibid., V, 6, 1798.
- ⑦2 Ibid., IV, 6, 1434 に続く。
- ⑦3 Cf., K. Loukovitch, op. cit., p. 256.
- ⑦4 Polyeucte, I,3, 214—216.
- ⑦5 Ibid., III, 2, 777—778.
- ⑦6 Ibid., III, 2, 799—800.
- ⑦7 Ibid., V, 5, 1739.
- ⑦8 Ibid., IV, 3, 1251—1252.
- ⑦9 A. Adam, op. cit., t. 1, p. 540.
- ⑧0 Polyeucte, IV, 3, 1199.
- ⑧1 Ibid., IV, 3, 1285.
- ⑧2 Ibid., IV, 3, 1285.
- ⑧3 Ibid., II, 2, 503—504.
- ⑧4 Ibid., IV, 5, 1336.
- ⑧5 Ibid., V, 3, 1681.

- ③⑥ Ibid., V, 5, 1727.
 ③⑦ A. Adam, op. cit., t.1, p. 539.
 ③⑧ Examen de Polyeucte, Théâtre complet (Pléiade), op. cit., t.1, p. 918.
 ③⑨ Discours de la tragédie, Ibid., pp. 40—41.
 ③⑩ Dédicace à la Reine Régente, Ibid., p. 911.
 ③⑪ Examen de Polyeucte, Ibid., p. 916.

参 考 文 献

- Pierre Corneille : Œuvres de P. Corneille (Les Grands Ecrivains)
 : Théâtre complet (Bibliothèque de la Pléiade)
 : Œuvres complètes (Aux Editions du Seuil)
- Antoine Adam : Histoire de la littérature française au XVII^e siècle, t.1,
 t. 2 (del Duca).
- Octave Nadal : Le sentiment de l'amour dans l'œuvre de Pierre Corneille
 (Gallimard)
- René Pintard : Autour de Cinna et de Polyeucte (P. H. L. F., 1964)
- André Stegmann : L'héroïsme cornélien (Armand Colin)
- Henry Carrington Lancaster : A history of french dramatic literature in
 the seventeenth century, Part II, vol. 1 (Gordian Press)
- M. Magendie : Des sources inédites de Polyeucte (P. H. L. F., 1932)
- J. Calvet : Polyeucte de Corneille (Mellottée)
- Charles Dédéyan : Les débuts de la tragédie cornélienne et son apogée
 d'après Polyeucte (Centre de Documentation Universitaire)
- Kosta Loukovitch : L'évolution de la tragédie religieuse classique en France
 (Droz)
- René Bray : Formation de la doctrine classique (Nizet)
- Boileau : Œuvres complètes (Bibliothèque de la Pléiade)
- G. Mongrédien : Recueil des textes et des documents du XVII^e siècle relatifs
 à Corneille (C. N. R. S.)
- Voltaire : Œuvres complètes, t. 2, t. 31, (Garnier Frères)
- Georges Couton : Corneille (Hatier) ; Réalisme de Corneille (Les Belles
 Lettres)
- Jean Schlumberger : Plaisir à Corneille (Gallimard)
- Ferdinand Brunetière : Les époques du théâtre français (Calmann Lévy)

Serge Doubrovsky : *Corneille et la dialectique du héros* (Gallimard)

Jules Lemaitre : *Impressions de théâtre, t. 1*, (Boivin & C^{ie})

Maurice Descotes : *Les grands rôles du théâtre de Corneille* (P. U. F.)

Sainte-Beuve : *Port-Royal, t. 1*, (Bibliothèque de la Pléiade)

“Polyeucte” ou la tragédie de la grâce

Nobuya MURASE

Ce qui nous frappe le plus dans “Polyeucte”, c’est que la grâce y joue un rôle très important. Cette intervention d’une force surnaturelle et mystérieuse donne un caractère exceptionnel à la pièce en comparaison des ouvrages précédents de Corneille. Dans ces derniers, nous pouvons savoir quels mobiles déterminent les gestes des personnages : “Aucune force contrôlable, dit Antoine Adam, ne peut expliquer la résolution de Polyeucte, la conversion de Pauline ou de Félix.”

Mais d’autre part, si “Polyeucte” est le chef-d’œuvre du théâtre chrétien de langue française, ce serait que la pièce est soigneusement débarrassée des scènes miraculeuses. Tandis qu’elles emplissent au 17^e siècle la plupart des drames du même genre, “Polyeucte” échappe à l’abus du merveilleux. N’est-il donc pas possible de découvrir des mobiles très humains dans les trois actes qu’Antoine Adam considère comme inexplicables psychologiquement : résolution de Polyeucte, conversion de Pauline et de Félix ?

Nous allons analyser la pièce de ce point de vue après avoir porté la lumière sur des faits nécessaires pour mieux la comprendre : date de sa première représentation, sources, climat spirituel qui a permis à l’auteur de travailler à une tragédie chrétienne, et surtout critique des doctes et des mondains sur “Polyeucte” (chap. 1—4).

Quand est-ce que Polyeucte prend la résolution de détruire les idoles ? Supposons qu’il l’ait déjà prise lorsqu’il reparait en scène

après son baptême (acte II, scèneIV) ; alors, ses efforts pour apaiser Pauline inquiète de la destinée de son mari seraient hypocrites, parce que lui-même a la conviction de sa mort. Il se détermine plutôt entre les vers 636 et 640. Cette décision si soudaine, qui ne s'explique peut-être que par une force mystérieuse, paraît négliger la vérité psychologique, ce qui donne raison à Adam.

On doit chercher le mobile de la conversion de Pauline dans son sentiment amoureux. Corneille nous dit qu'elle a été subitement éclairée par la grâce. On peut penser au contraire que c'est par amour qu'elle se fait chrétienne.

Dans la pièce il y a deux amours mais non pas de même nature. L'amour de Pauline et de Sévère repose sur le code de "l'amour héroïque dont le principe est la gloire ou l'honneur ; ils rivalisent l'un avec l'autre de générosité, de grandeur d'âme, de fidélité au devoir. Le charme qui emporte Pauline vers Sévère est surtout l'attraction qu'exercent sur elle le prestige du héros et sa renommée.

Au départ, c'est seulement par devoir que Pauline aime son mari ; elle hésite entre les deux amours. Mais à la fin, elle surmonte son inclination pour Sévère en lui substituant sa passion pour Polyeucte. Cette passion n'a aucun rapport avec le prestige de la gloire. Lorsque Stratonice lui annonce l'iconoclastie de Polyeucte, elle répond : "Quelque chrétien qu'il soit, je n'en ai point d'horreur ; Je chéris sa personne". Elle ose aimer un criminel. Les paroles qu'elle adresse à Polyeucte juste avant son martyre laissent pressentir sa conversion : "Je te suivrai partout et mourrai si tu meurs".

On peut attribuer la conversion de Félix, inexplicable psychologiquement, à l'exigence de la dramaturgie. L'auteur doit satisfaire la curiosité des spectateurs : que deviennent Félix, Pauline et Sévère

après la mort du héros? Le plus simple moyen de brusquer le dénouement est la conversion des personnages.

Selon son interprétation de "l'Art Poétique" d'Aristote, Corneille se trouve dans la nécessité de réconcilier les spectateurs avec Félix : la tragédie ne doit pas "exciter plus d'indignation et de haine contre celui qui fait souffrir que de pitié pour celui qui souffre". En un mot, celui qui persécute le héros ne doit pas être fondamentalement méchant. Félix chrétien satisfait cette exigence.